

試験研究成果普及情報

部門	資源管理・増養殖	対象	普及・研究・行政
課題名：九十九里海域における砂浜性貝類の漁獲量の長期変動			
<p>[要約] 九十九里海域は、チョウセンハマグリ、サトウガイなどの有用な貝類が多く水揚げされる海域である。これら貝類は、長期的に優占種が変化しており、その傾向及び特徴について解析を行った。</p> <p>その結果、本海域が分布の縁辺にあたる種にとっては、水温の変化が及ぼす影響は大きいと考えられた。九十九里海域では年間 100～7,000t の間で漁獲量が変動していたが、年代ごとに主要となる貝の種類が入れ替わりながら漁業が維持されてきた生産性の高い海域であると考えられた。</p>			
キーワード： 九十九里、貝類、漁獲量変動、水温変動、クロロフィル濃度			
実施機関名	主 査	千葉県水産総合研究センター	資源研究室
	実施期間	2017 年度	

[目的及び背景]

漁獲量の長期的な動向は、貝類資源の変動パターンや今後の資源量を予測するうえで重要な情報である。そのため、1969-2015 年の同海域における貝類の漁獲量を整理し、水温の経過と併せて長期変動の解析を行った。

[成果内容]

- 1 貝類漁獲量は、1969 年から 2015 年までに年間 100～7,000 トンの変動があった。
- 2 漁獲の主体は、1970 年代はサトウガイとコタマガイ、1980 年代前半はサトウガイとダンベイキサゴ、1980 年代後半から 1990 年代はダンベイキサゴとチョウセンハマグリ（1990 年代はウバガイも）、2000 年代前半はチョウセンハマグリとサトウガイ、2000 年代後半から現在はチョウセンハマグリであった（図 1）。
- 3 過去の知見によると、上記 5 種の水温適性には差異があり、本海域が分布の北限であるサトウガイが 1982-1983 年の夏の異常低水温の影響で大量斃死し、本海域が分布の南限であるウバガイが 1990 年代の夏の水温下降期に漁獲されるなど、水温変動が資源に大きな影響を及ぼすと考えられている（図 2、3）。
- 4 そのため、水温変動によりある種が減少しても他種が増加することによって漁獲対象種が入れ替わり、これらの貝類を漁獲する貝桁網漁業が維持されてきたと考えられた。

[留意事項] なし

[普及対象地域] 九十九里地域貝類漁業者

[行政上の措置] なし

[普及状況] なし

[成果の概要]

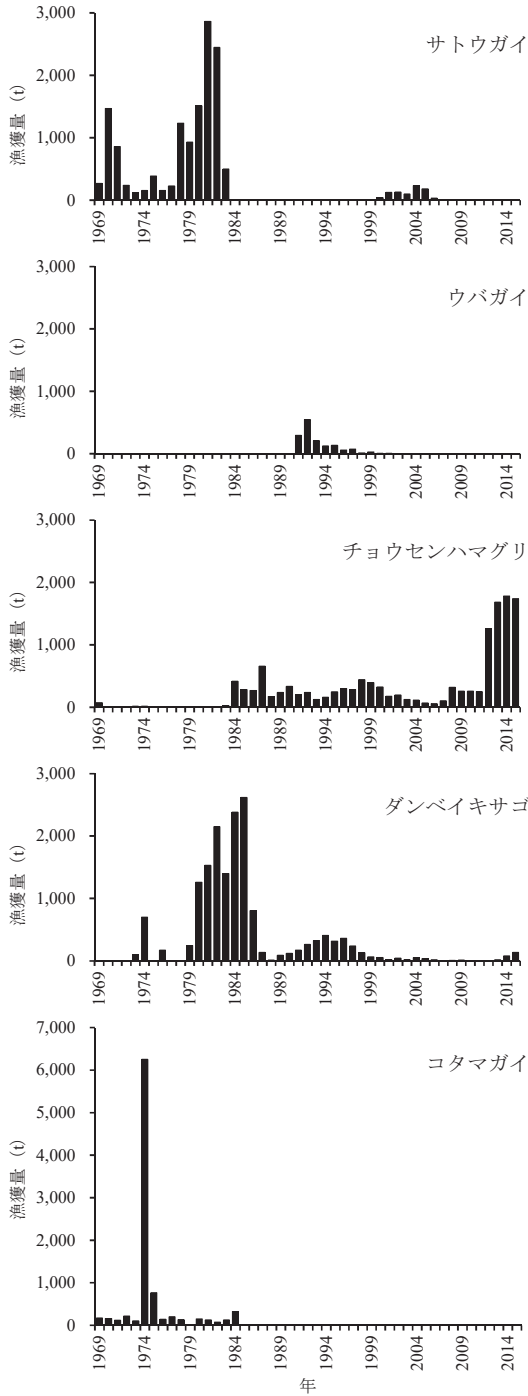


図1 九十九里海域における種別貝類漁獲量の経年変化

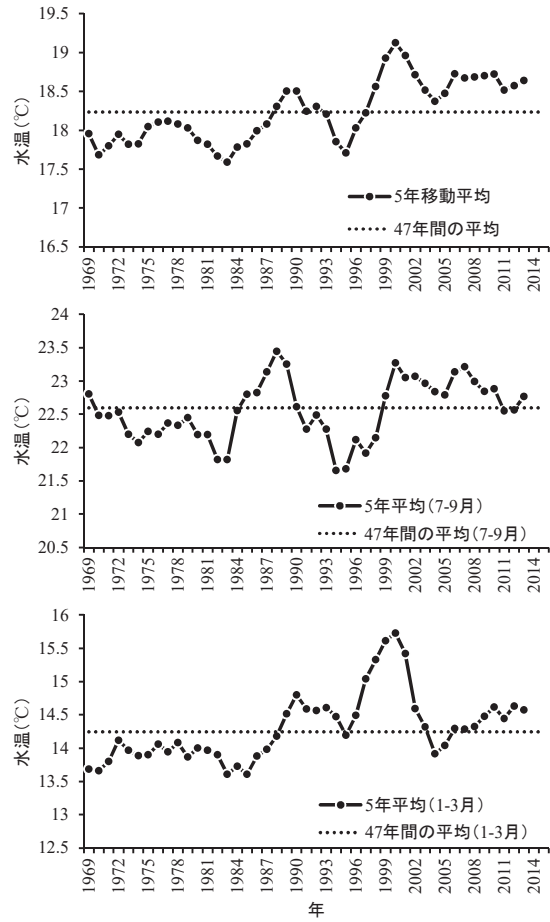


図2 九十九里沖における表面水温の経年変化

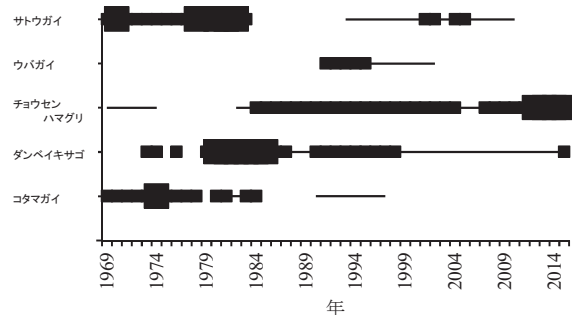


図3 九十九里海域における種別貝類漁獲状況。極太線は年間1,000 t以上、中太線は100 t以上、細線は1 t以上を示す。

[発表及び関連文献]

- 1 中川雄太：九十九里海域における砂浜性貝類漁獲量の長期変動、千葉県水産総合研究センター研究報告第12号（2018年）P9～15

[その他] なし